

西大寺弥勒金堂の調査

一第 655 次

1 調査の経過

調査に至る経緯 本調査は、個人住宅の建て替えにともなう事前調査として実施した。調査地は、奈良市西大寺小坊町に所在し、平城京右京一条三坊九坪、そして奈良時代後半に創建された西大寺の弥勒金堂推定地にあたる。調査地周辺の調査では西大寺金堂院の遺構を確認しており、本調査では弥勒金堂に関連する遺構の検出が予想された。

作業の経過 調査期間は2023年3月1日から4月4日までである。発掘作業に先立って、2月24日に、奈良県文化財保存課および奈良市教育委員会を交えて現地協議をおこなった。2月27・28日には、基準点測量および調査区の設定、レベル移動を実施した。3月1日から重機による掘削を開始し、順次人力掘削に切り替えて遺構検出を進めた。3月6・10日に調査区全景写真の撮影をおこなった。3月7日には、再度県、市と現地協議をおこない、同日以降に遺構実測と各遺構の断割調査を進めた。3月28日より遺構保護のための砂撒きと重機による埋め戻しを開始し、3月30・31日に拡張区の調査を実施した。4月4日に埋め戻しを完了し、現場を撤収して発掘作業を終了した。

本調査では発掘作業と並行して、出土遺物の洗浄・整理作業をおこない、調査終了後も継続している。また、木質遺物等が良好に含まれる暗褐色粘質土や壺地業などの埋土については、一部をブロックで持ち帰り、整理室にて洗浄作業をおこなった。

2 遺跡の位置と環境

西大寺は、天平宝字8年(764)、孝謙太上天皇(のちの称徳天皇)が、藤原仲麻呂の乱に際して四天王像の造立を発願したことにはじまる(『西大寺資財流記帳』以下、資財帳)。天平神護元年(765)に伽藍の造営が開始されるが、神護景雲3年(769)に称徳天皇が西大寺へ行幸しており(『続日本紀』)、薬師金堂が先んじて完成していたと考えられる。同年6月に弥勒浄土を造るとあり(『扶桑略記』)、宝亀2年(771)には兜率天堂(弥勒金堂)の造営を以って正

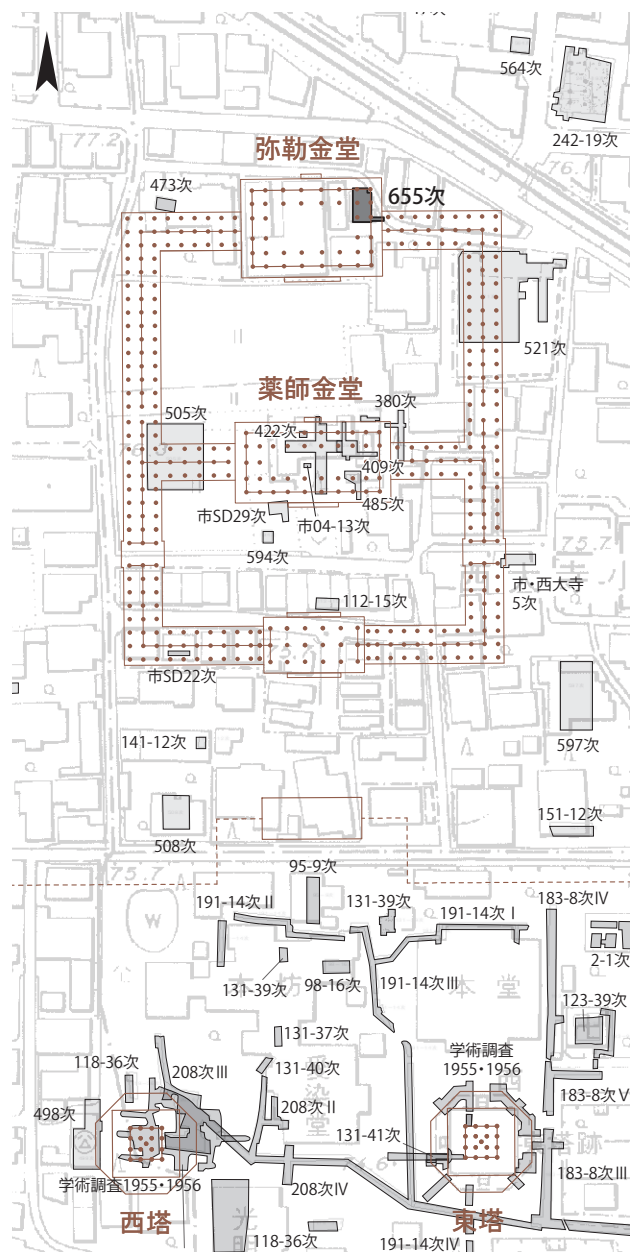


図124 第655次調査区位置図 1:2000

六位上英保首代作に外従五位下が与えられていることから(『続日本紀』)、770年前後には弥勒金堂が完成していたと考えられる。それから300年余りを経た嘉承元年(1106)の時点では、弥勒金堂が大破しており、仏像は食堂に安置されていたようである(『七大寺日記』)。これ以降、食堂が弥勒金堂としての役割を果たすようになり、創建当初の場所に弥勒金堂が再建されることはなかった。

弥勒金堂は、薬師金堂とともに金堂院を形成していた。金堂院の伽藍配置や両金堂の所在地については長い間諸

説あったが、発掘調査の蓄積とともに研究が大きく進展しつつある。金堂院周辺では、薬師金堂（奈良市 04-13 次¹⁾、平城第 409 次（『紀要 2007』）、第 422 次（『紀要 2008』）、第 485 次（『紀要 2012』）や西面回廊・薬師金堂軒廊（第 505 次（『紀要 2014』）および東面回廊（奈良市西大寺 5 次²⁾、第 521 次（『紀要 2014』））の調査が実施されており、遺構が良好な状態で遺存することがあきらかになっている。

これらの調査成果をもとに金堂院の伽藍復元案が作成されており（『紀要 2014』）、弥勒金堂は、薬師金堂の北に配置され、北面回廊が接続していたと想定されている。しかし、弥勒金堂に対する調査は今までおこなわれておらず、堂宇の正確な位置は不明であった。

調査地は、弥勒金堂の東北隅部分に想定され、遺構の有無の確認と既往の復元案の検証が求められた。

3 調査の方法と成果

（1）調査の方法

調査区は、東西最大 5 m、南北最大 9 m、調査面積 43.8㎡の範囲で設定した。その後、調査地に隣接する電柱の本柱・支線の移設工事の届出があり、支線移設箇所における遺構遺存状況の確認のため、調査区東南隅から延びる東西 3.3 m、南北 1 m の拡張区を設定した。最終的な調査面積は、47.1㎡である。

発掘調査では、GNSS 測量機を用いたネットワーク型 RTK 法で調査区近傍に 2 つの基準点（ $X=-144,687.800$ 、 $Y=-20,235.395$ および $X=-144,698.042$ 、 $Y=-20,228.938$ ）を設定した。これらの基準点からトータルステーションで調査区内に基準線を設定し、縮尺 1/20 を基本に平面図を作成した。標高は、旧平城 No.14（ $X=-145,126.190$ 、 $Y=-19,244.829$ 、 $H=69.071$ m）を基準として第 627 次調査（2020 年度）で設置した基準点からオートレベルで直接水準測量をおこなった³⁾。

発掘作業は重機掘削により表土、床土、遺物包含層を除去した後、人力により掘削および遺構検出をおこなった。また、住宅建設時にフォースパイルが施工される箇所については、幅 80cm のトレンチを設定し、断割調査を実施した。また、調査区内で土壌サンプルの採取をおこなった⁴⁾。写真記録はデジタル撮影でおこなった。

なお、断割調査で検出した壺地業については、土層断面の観察と記録をおこなったが、安全確保のため、地業

底面を確認する前に掘削を取りやめた。断割調査中に出土した木質遺物については可能な限り取り上げた。

（2）基本層序

現地表面から表土（厚さ 10～20cm）、床土（5～20cm）、近世～近代遺物包含層（5～10cm）、弥勒金堂の基壇土である青灰色粘質土層（20～60cm）、奈良時代中頃の整地土である暗褐色粘質土層（1.6m 以上）を確認した（図 126～131）。この暗褐色粘質土層は、第 521 次調査において、金堂院東面回廊 SC1120 基壇土の下層で検出した「西大寺以前の整地土」と一連の可能性はある（『紀要 2014』）。

遺構検出は青灰色粘質土層上面でおこなった。検出面の標高は 75.3 m 前後である。

なお、地山については標高 73.4m（現地表下約 2.2m）まで掘り下げたが確認できなかった。ただし、本調査の後に実施した、調査地の東南隅における電柱新設にともなう立会調査（第 2023-1 次調査）では、地表面から約 2.6m の深さまで掘削した結果、暗褐色粘質土下層の灰色砂を確認した。この灰色砂が地山と考えられる。

（3）検出遺構

弥勒金堂 SB1230（図 125～131、PL.41・42） 本調査では、調査区全面で基壇土を検出した。基壇土上面では礎石抜取穴を 6 基検出し、基壇土の下層で壺地業を確認した。

基壇土は、明確な版築は確認できないものの、10～20 cm の単位で青灰色粘質土を積み重ねている。残存する基壇土の厚みは、調査区北端では 20～30cm 程度、調査区南端では約 40cm で、北から南にむけて厚さを増す。基壇構築前の整地面は平坦ではなく、基壇土下面の標高が南へ向かって低くなっていたとみられる。

基壇縁は北辺、東辺ともに確認できなかった。調査区南東に設定した拡張区では、基壇土が連続する状況を確認した。ここは弥勒金堂と北面回廊の接続部分にあたると思われるが、回廊基壇よりも高い部分の弥勒金堂基壇土は完全に削平を受けており、弥勒金堂と北面回廊の基壇土が一連で構築されていた可能性がある。

なお、総地業の有無は、本調査区の所見だけでは判断できない。本調査区に近い第 521 次調査の状況をみると、金堂院東面回廊 SC1120 基壇下層における整地土上面の標高は 74.7m である（『紀要 2014』）。本調査区の整地土上面の標高は、調査区南で 74.8～74.9m と、回廊基壇下層の整地土上面とほぼ同じ高さである。弥勒金堂基壇の範

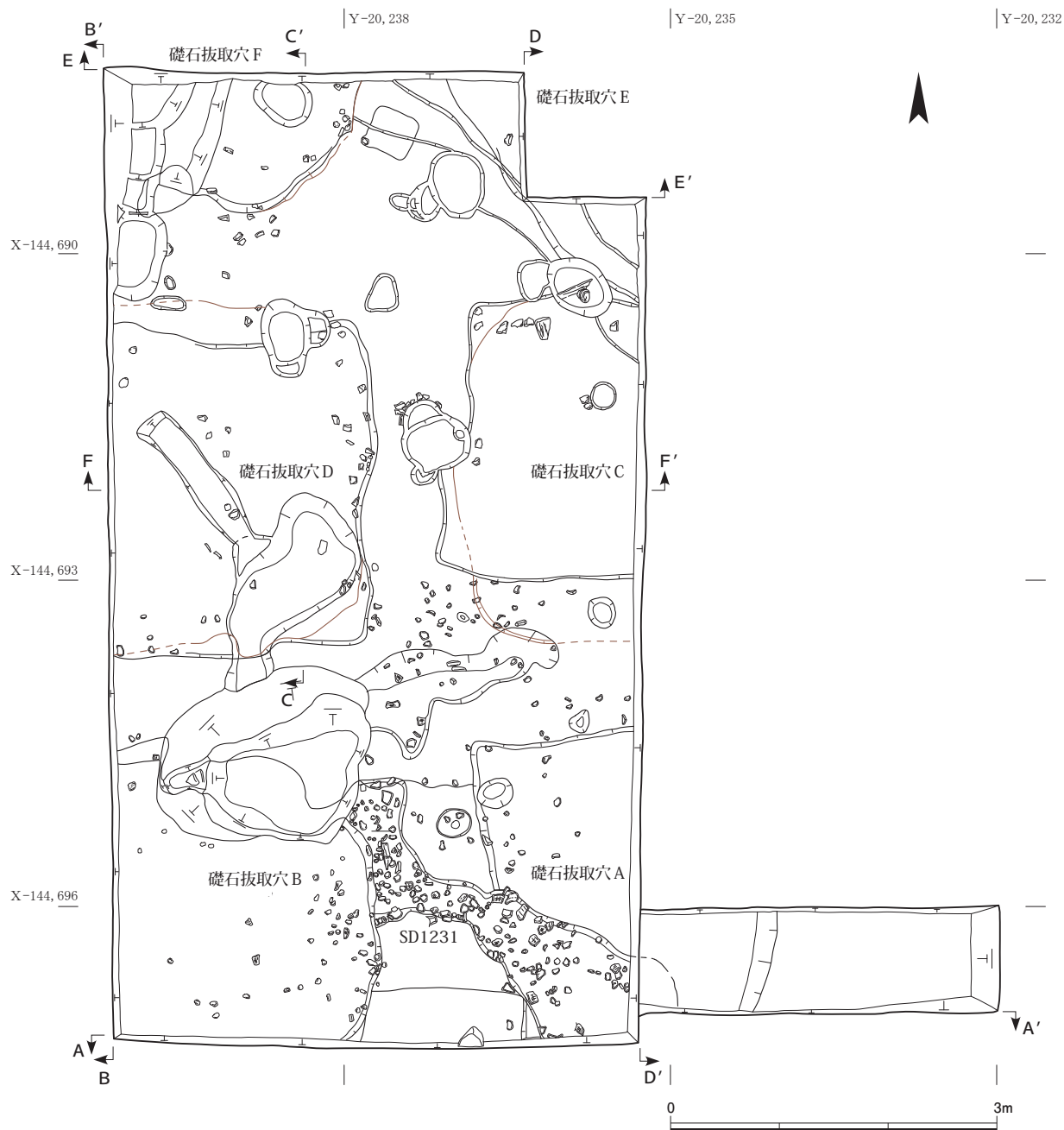


図 125 第 655 次調査区遺構図（基壇土上面検出遺構） 1 : 60（赤ラインは断割調査により確認した採取穴の輪郭を示す）

囲全域が、周辺よりも低く掘り込まれていないことから、総地業はおこなわれなかったと推定できる。

礎石採取穴 A～F 基壇土上面から掘り込まれた大型の土坑を計 6 基検出した（図 125）。規模がわかるものは直径 3 m 前後で、平面形状は円形に近いものや歪な隅丸方形を呈するものがある。深さはいずれも 60cm 前後だが、礎石採取穴 B のみ 1.2m と深い。

埋土は基壇土と極めて良く似るが、礫や瓦、土器を多

く含む。また、中世の瓦や近世の土器・陶磁器が出土しており、弥勒金堂廃絶後の遺構である。弥勒金堂の推定柱位置とほぼ一致しており、礎石採取穴と考える。

壺地業 A～F 基壇土の下層で、暗褐色粘質土層上面から掘り込まれた大型の土坑を 6 基検出した（図 126）。これらの土坑は、基壇土下層にある奈良時代中頃の整地土上面から掘り込まれており、基壇造成の前段階のものである。礎石採取穴と重複する位置にあたり、石や瓦を

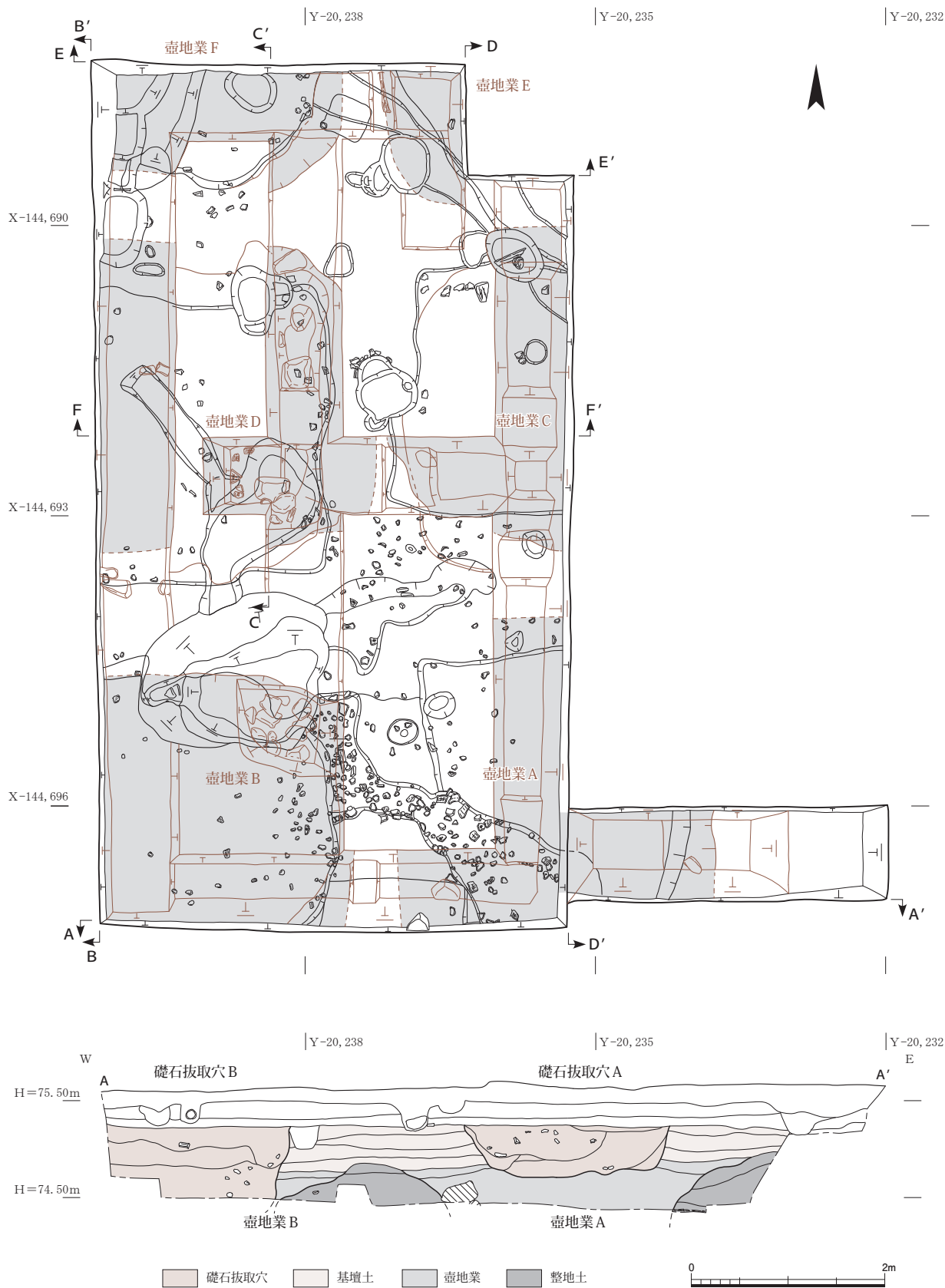


図 126 第 655 次調査区遺構図 (断制調査検出遺構)・南壁土層図 (東西反転) 1 : 60

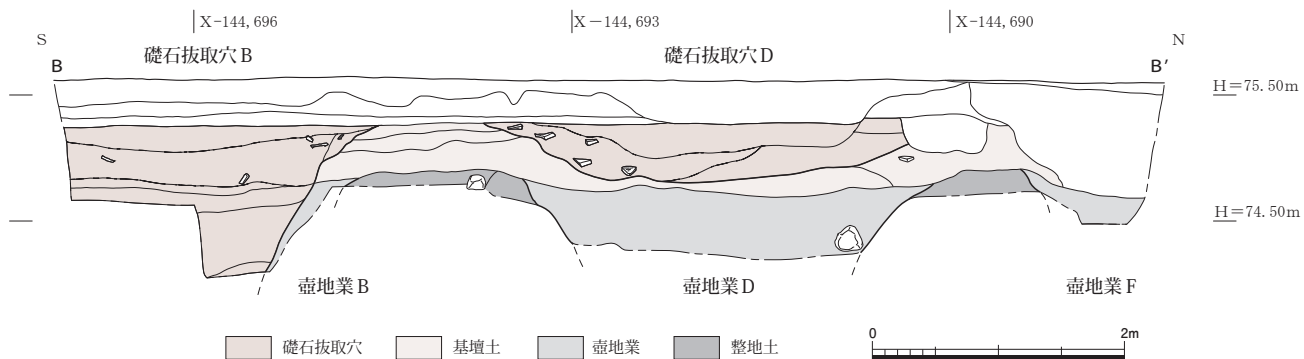


図 127 調査区西壁土層図 1 : 60

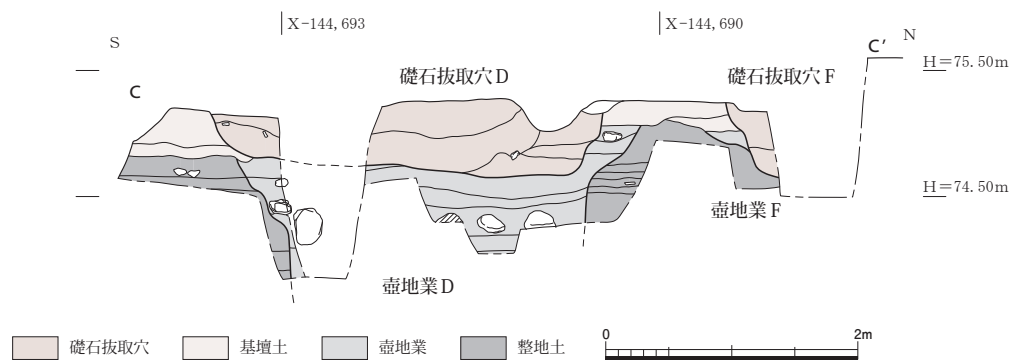


図 128 調査区中央南北断西壁土層図 1 : 60

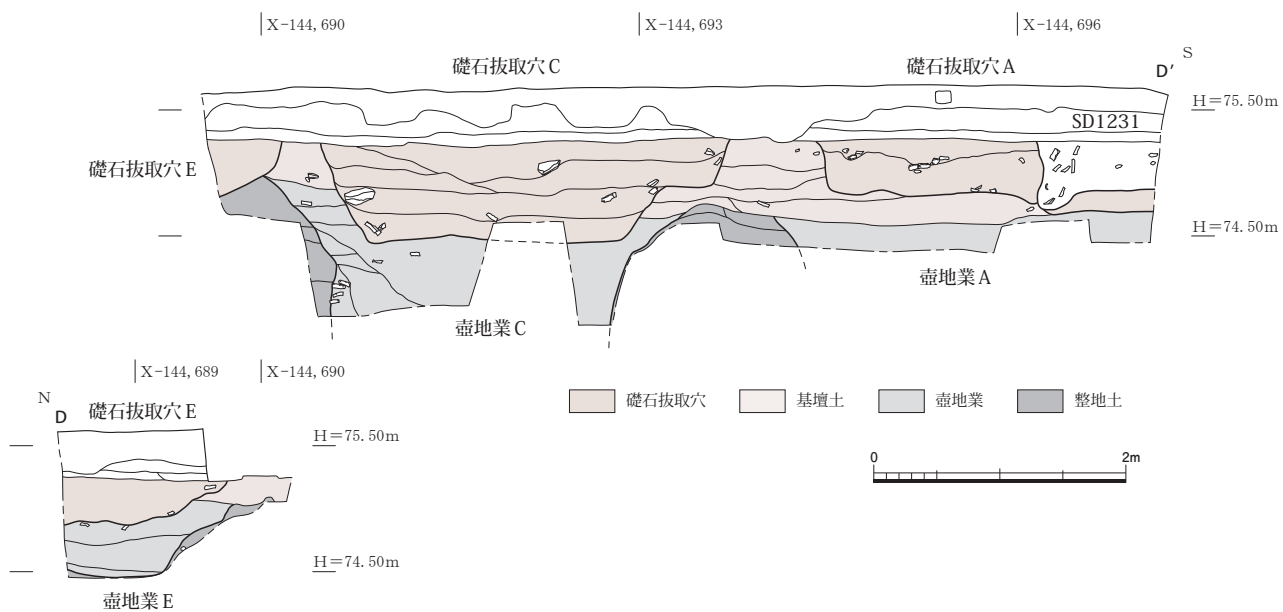


図 129 調査区東壁土層図 1 : 60

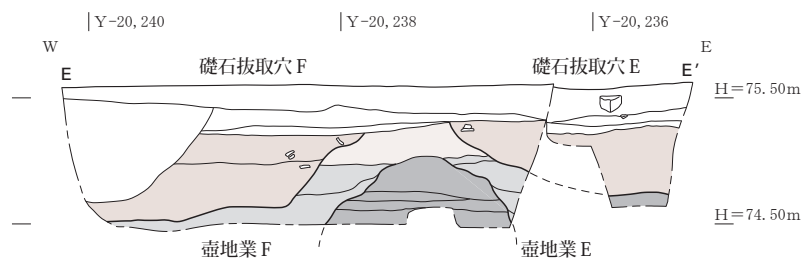


図 130 調査区北壁土層図 1 : 60

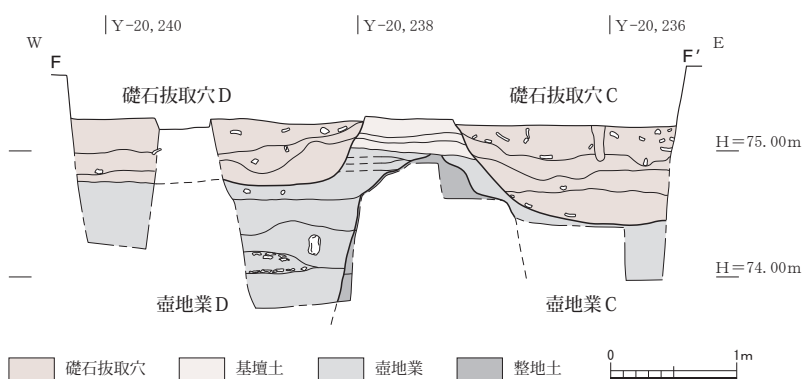
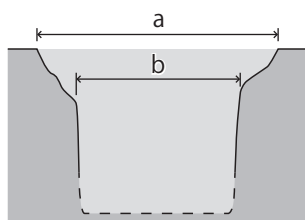


図 131 調査区中央東西断割北壁土層図 1 : 60

表 21 弥勒金堂 SB1230 壺地業一覧表

遺構	東西規模 (cm)		南北規模 (cm)		深さ (cm)	石	瓦	特 徴
	a	b	a	b				
壺地業A	360	240?	(300)	—	(50)	○	○	西肩に30cm前後の石を2つ入れる。
壺地業B	(260)	—	(250)	—	(140)	◎	◎	20cm前後の石を比較的密に入れる。その下層でも瓦を面的に敷き込む。 西大寺創建期軒瓦出土。
壺地業C	(180)	(130)	330	240	(110)	○	○	西肩に約20cmの石を入れる。
壺地業D	(280)	(220)	310	240	(120)	○	◎	30～40cmの石を疎らに入れる。その下層でも瓦を面的に敷き込む。 西大寺創建期軒瓦出土。
壺地業E	(190)	—	(130)	—	(60)	—	○	石や瓦敷は未確認。
壺地業F	(260)	—	(150)	—	(60)	—	○	石や瓦敷は未確認。



- a : 検出面の寸法
b : 垂直に近い角度で掘り込まれる部分の上面の寸法
◎ : 石/瓦を面的に敷き込む
○ : 石/瓦を疎らに入れる
— : 石/瓦を確認できず
※括弧は確認できた範囲の寸法・深さ



図 132 壺地業 B 石敷検出状況（北から）



図 133 壺地業 B 瓦敷検出状況（北から）



図 134 壺地業 B 軒丸瓦出土状況（東から）

入れながら埋めている状況や、西大寺創建期の軒瓦を含むことをふまえると、弥勒金堂の礎石下方の地盤改良を目的とした壺地業であると考えられる。これらの壺地業は、基壇土である青灰色粘質土に覆われており、断割調査によって部分的に確認したに留まる。

検出した壺地業は、暗褐色粘質土上面で一辺 3.0～3.6 m の隅丸方形を呈する。断面は二段掘り状を呈し、検出面から深さ約 50cm まではなだらかに傾斜する。その下は一辺約 2.4m の隅丸方形の平面となり、ほぼ垂直に落ち込む（表 21 模式図）。検出面からの深さは最大 1.4m 以上あるが、いずれの壺地業でも底面は確認できなかった。

埋土は、暗褐色粘質土と青灰色粘質土のブロックが混ざったものである。厚さ 10～50cm の単位で土を積み重ねており、明確な版築はほとんど確認できないが、壺地業 D の上部では厚さ 5 cm 前後の単位で埋めた状況が認められた（図 131）。埋土には大ぶりの石や瓦を含むものがあるが、それぞれの壺地業で状況は異なり、次の 4 種類に分類できる（表 21）。

- ①大ぶりの石を疎らに入れる（壺地業 A・C）
- ②大ぶりの石を疎らに入れつつ、瓦を面的に敷き込む（壺地業 D）
- ③大ぶりの石と瓦を面的に敷き込む（壺地業 B）
- ④大ぶりの石や瓦敷きが認められない（壺地業 E・F）

このうち壺地業 B では、石敷面を 1 層（標高約 74.0m、図 132）、その下層で瓦敷面を 1 層確認している（標高約 73.9m、図 133）。さらにその下では、瓦当面を完全に残す軒丸瓦が出土した（標高約 73.6m、図 134）。壺地業 D では石を疎らに入れる層と、部分的な瓦敷面を 1 層確認しており、東北隅の肩部には、下面に「出」の墨書をもつ石が据えられていた（図 128）。

今回は部分的な調査に留めたため、大半が調査区外となる壺地業 E・F は、①～③に分類できる可能性が残る。

瓦溝 SD1231 調査区東南部で検出した斜行溝で、幅 0.3～1.2m、深さ最大 0.4m、長さ約 3.5m 分を検出した。大量の古代の瓦と近世までの土器・陶磁器を少量含む。礎石抜取穴 A・B と重複関係にあり、礎石抜取穴 A が埋没した後に掘削され、礎石抜取穴 B よりも前に埋められている。

（田中龍一）

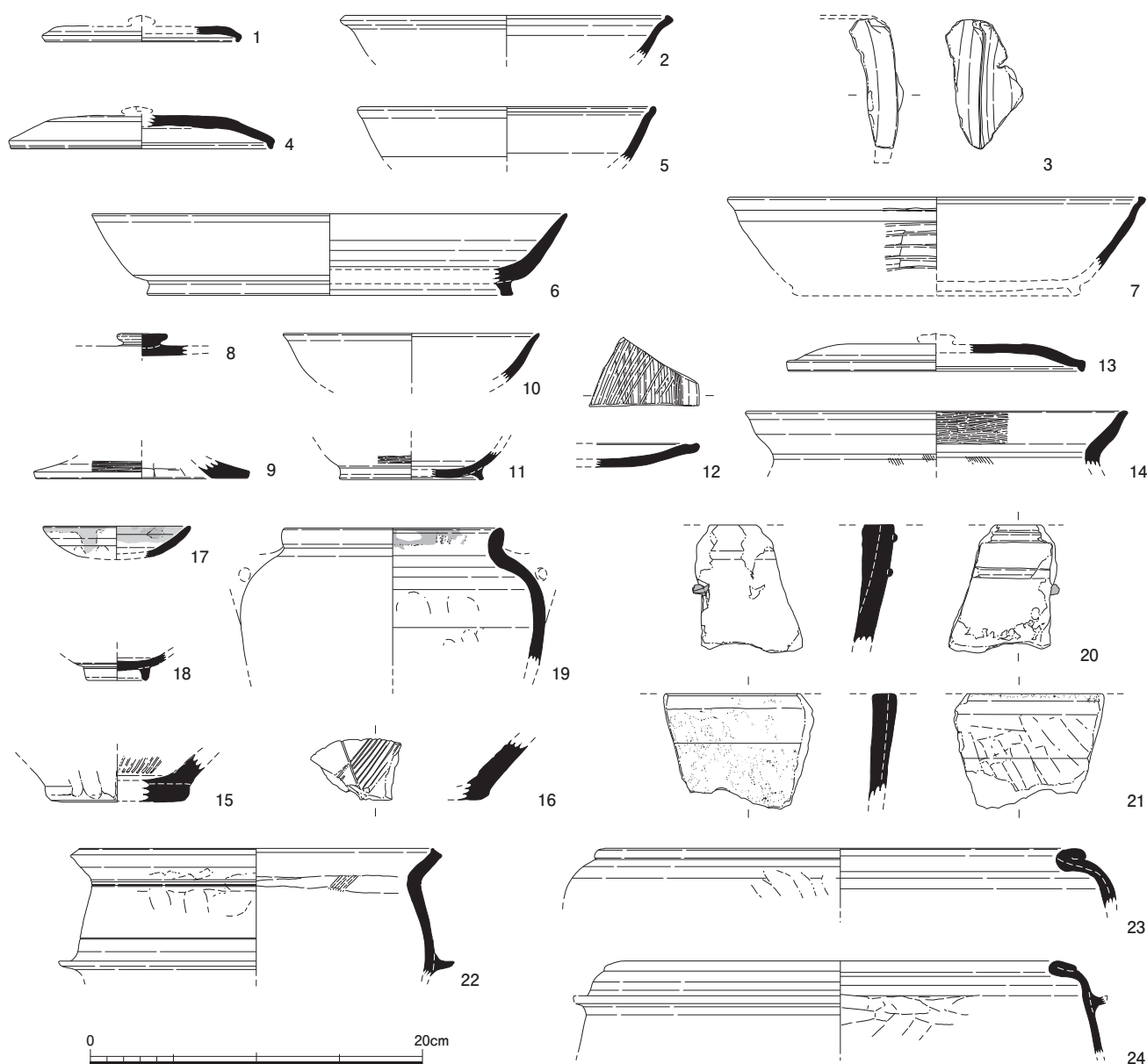


図 135 第 655 次調査出土土器 1 : 4

(4) 出土遺物

土器・土製品

第 655 次調査区からは整理用コンテナ 6 箱分の土器・土製品が出土した。奈良時代の須恵器・土師器および近世の土師器・瓦質土器・陶磁器が中心で、古墳時代の埴輪や中世の瓦器片などを少量含む。以下、各遺構・層位出土土器について記述する（図 135）。

基壇土出土土器・土製品 基壇土中から出土した土器の量は少なく、小片が多い。1 は須恵器杯 B 蓋。端部を小

さく下方に折り曲げる。2 は須恵器杯 C。口縁端部を肥厚させ、端部外面に平坦面を有する。内面に火轆痕跡を有する。3 はミニチュア竈。側面の廂部が残存する。器壁が薄く、赤褐色の色調を呈する。これらの土器は奈良時代中頃～後半に位置づけられる。

整地土出土土器 基壇構築以前の整地土である暗褐色粘質土層から出土した土器も量的には少ない。4 は須恵器杯 B 蓋。平坦な頂部から緩やかに口縁部が降る。端部を下方に折り曲げる。5 は須恵器杯 C。口縁端部を肥厚

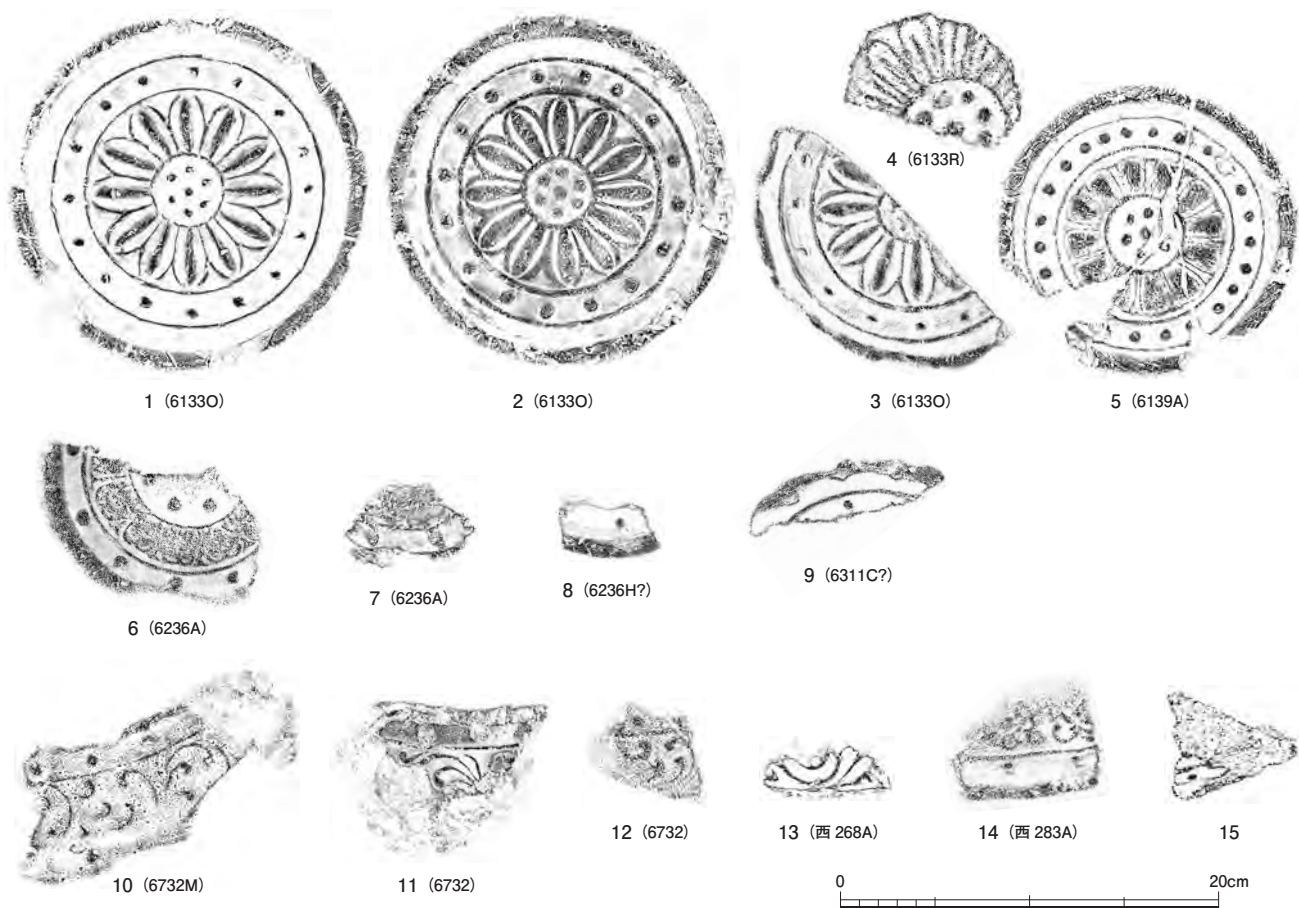


図 136 第 655 次調査出土軒瓦 1 : 4

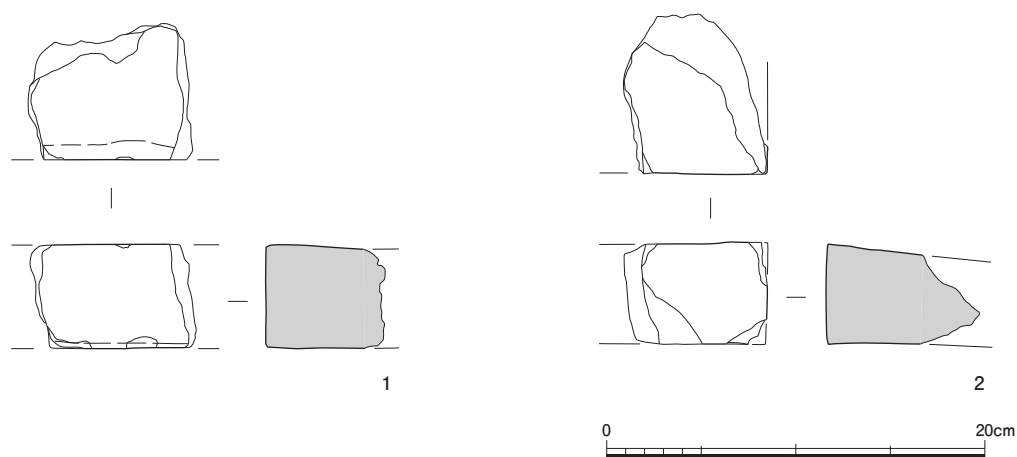


図 137 第 655 次調査出土緑釉磚 1 : 4

込まれる小穴から出土。4 は 6133R。西大寺創建期（Ⅳ-2 期）。礎石抜取穴 E 出土。5 は 6139A。西大寺創建期。壺地業 D 出土。6・7 は 6236A。6 は礎石抜取穴 B、7 は礎石抜取穴 E 出土。西大寺創建期。8 は 6236H か。壺地業 C 出土。西大寺創建期。9 は 6311C か。水平方向の

剥離痕跡から積み上げ技法による成形台一本づくりと考えられる。Ⅱ-2 期。壺地業 C 出土。

軒平瓦 軒平瓦は 12 点出土している。10 は 6732M。礎石抜取穴 B 出土。西大寺創建期。11・12 は 6732。11 は壺地業 B 出土。12 は基壇土出土。ともに西大寺創建期

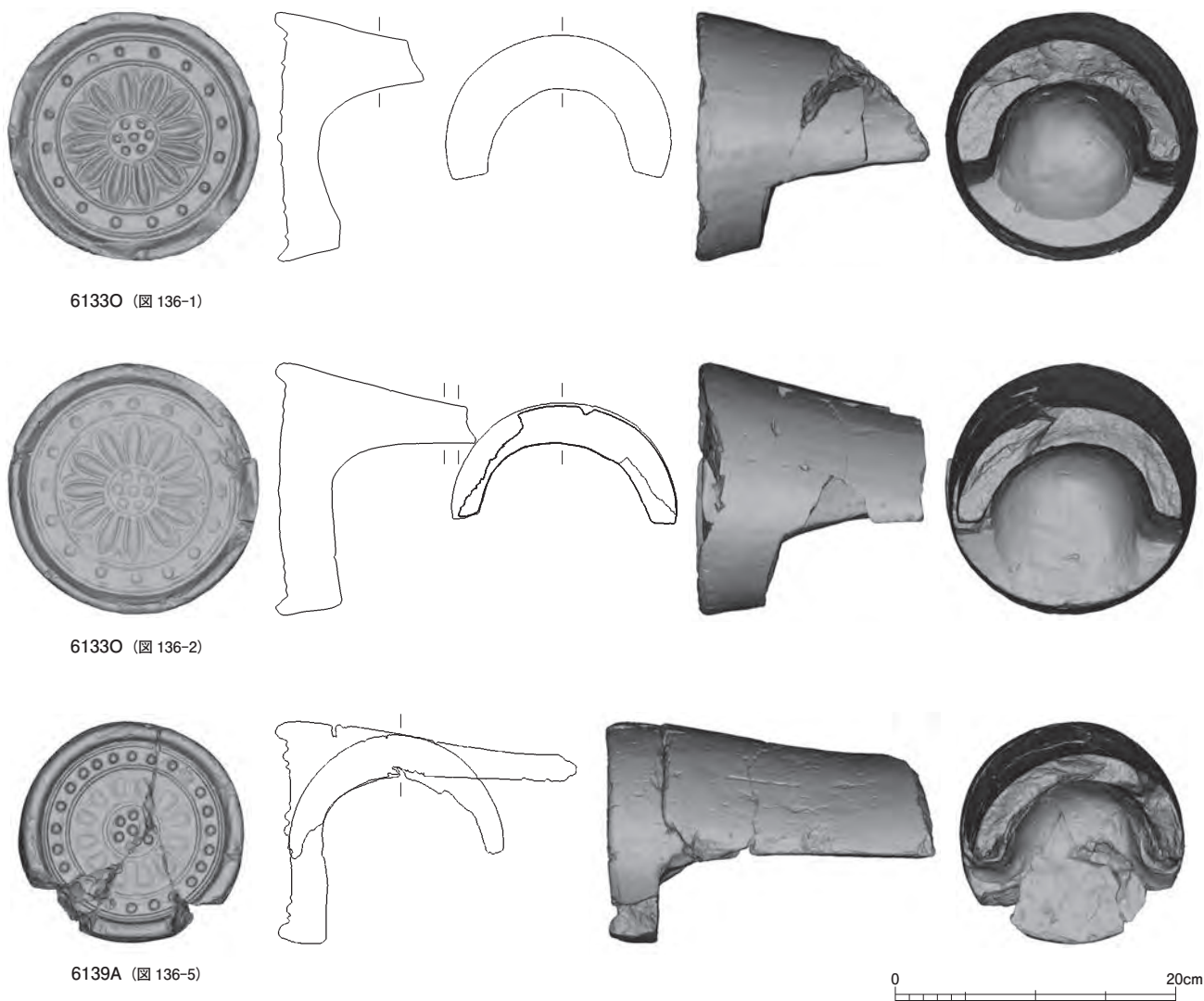


図 138 弥勒金堂 SB1230 壺地業出土軒丸瓦展開図 1 : 5

か。13は西大寺 268A。外区・脇区をもたない偏行唐草文。礎石抜取穴 C 出土。平安時代後期（11 世紀後半）。14は西大寺 283A。中心に 9 弁の花文を置く均整唐草文。平安時代前～中期（9～10 世紀）か。15 は、瓦当面と顎部がわずかに残る。曲線顎Ⅱで顎面が 2 cm と広い。鎌倉時代。断割調査中に基壇土出土として取り上げたが、礎石抜取穴 C からの混入と考えられる。

その他の瓦磚類 緑釉磚が 2 点出土した（図 137）。ともに端面に施釉する。このほか分割截線を入れた割熨斗瓦や、面戸瓦などの道具瓦も出土している。

各遺構における瓦の出土状況 礎石抜取穴には、古代の丸・平瓦をはじめ、西大寺創建軒瓦、平安時代の軒瓦や中世の丸瓦・平瓦もごく少量含まれる。弥勒金堂は、平

安時代のうちに倒壊し、食堂が弥勒金堂の役割を果たすようになるため、創建時の場所では再建されなかったと考えられる。これは、近世の礎石抜取穴から出土する瓦の大部分が古代のものであることと整合的である。

壺地業からは、61330、6139A、6732 などが出土している。西大寺創建期までの瓦が含まれており、壺地業が弥勒金堂造営期のものであることを追認する。

整地土からは、軒瓦はないものの少量の丸・平瓦が出土している。西大寺創建期のものと明確に認められるものはないが、凹面から端面に布目が連続する平瓦片が含まれており、奈良時代の瓦と考えられる。

なお、基壇土と壺地業の出土瓦は、弥勒金堂の木部（軸部）の造営前に廃棄されたものであり、これらの瓦から



打ち
(刻書)
(159)・(40)・8 081

図 139 第 655 次調査出土木簡

弥勒金堂所用瓦を特定することは困難である。

木器・石器・金属器

木器（バット 28 箱）、石器・冶金関連遺物（バット 3 箱）、木炭・種子等（バット 4 箱）が出土した。整地土から多くの木屑が出土している。現在整理作業中であり、来年度以降に報告予定である。（田中）

木 簡

木簡は、礎石抜取穴 A から 1 点出土した（図 139）。上端は右半削り（一部腐食）で左半折れ、下端折れ、左辺割れ、右辺削り（一部腐食）。上端付近に穿孔の痕跡が 2 箇所あり、「打ち」と刻書される。近世以降に属するとみられるが、性格未詳。（山本祥隆）

4 調査の総括

（1）弥勒金堂基壇の構築順序とその構造

本調査では、はじめて弥勒金堂の遺構を確認し、その構造に関する知見を得た。調査成果をもとに弥勒金堂の基壇・壺地業の構築順序を復元すると、以下のようになる。

①**整地** 西大寺造営前に整地（暗褐色粘質土）をおこなう。壺地業施工の前段階では、整地土上面はゆるやかな南下がりの地形であった。

②**壺地業** 礎石の据え付け予定位置に穴を掘り、石や

瓦を入れながら埋め戻す（壺地業）。穴ごとに石や瓦の入れ方はかなり異なる状況を呈する。壺地業の埋土は、整地土および基壇土と同様の青灰色粘質土が混ざったものである。

③**基壇** 壺地業の施工後、基壇土を積む。本調査では、礎石抜取穴のみを検出し、礎石据付穴は確認できなかったことから、礎石は基壇土を積む過程で据え付けたと推定される。

④**弥勒金堂基壇の構造** 弥勒金堂では基壇の構築前に壺地業をおこなっていることがあきらかとなった。礎石の据え付け予定位置のみを壺掘りして地盤強化を図るという工法自体は西大寺の他の堂宇と共通する技術といえるものの、その構築順序や構造を比較すると、弥勒金堂の特徴が指摘できる。

西大寺では、薬師金堂や金堂院回廊、食堂院の調査において基壇土の上面から掘り込む礎石据付穴を検出し、凝灰岩の板石や大ぶりの石を入れた状況を確認している。これらも壺地業の一種であると評価でき⁵⁾、**基壇構築後に礎石据え付けと一連でおこなわれた壺地業といえる**。一方で、弥勒金堂の場合は基壇構築前に壺地業をおこなっており、壺地業→基壇構築+礎石据え付けという構築順序が想定できる。壺地業が基壇の構築前におこなわれ、基壇構築過程で礎石を据え付ける点で、西大寺の他の堂宇とは異なる。

なお、本調査において基壇上面で検出した土坑は、規模や配置から礎石抜取穴と考えた。一方で、隅丸方形の平面形状を呈するものもあることから、薬師金堂の調査で確認したような礎石下に据えられた長方形の板石（『紀要 2008』）の抜取穴に相当する可能性も想定する必要がある。本調査は部分的な調査に留まり、抜き取られた礎石に関わる情報が限られることから、今後の検討課題としたい。

（2）弥勒金堂の復元案

今回検出した礎石抜取穴・壺地業の位置と『紀要 2014』における弥勒金堂の推定柱位置を比べると、東西方向はほぼ一致するものの、南北方向は若干の相違があり、想定よりも 1 m ほど北にずれている。

本調査では礎石抜取穴・壺地業をそれぞれ 6 基検出したが、全体規模が把握できたものではなく、一部で東西もしくは南北の規模が判明したにとどまる。このように、

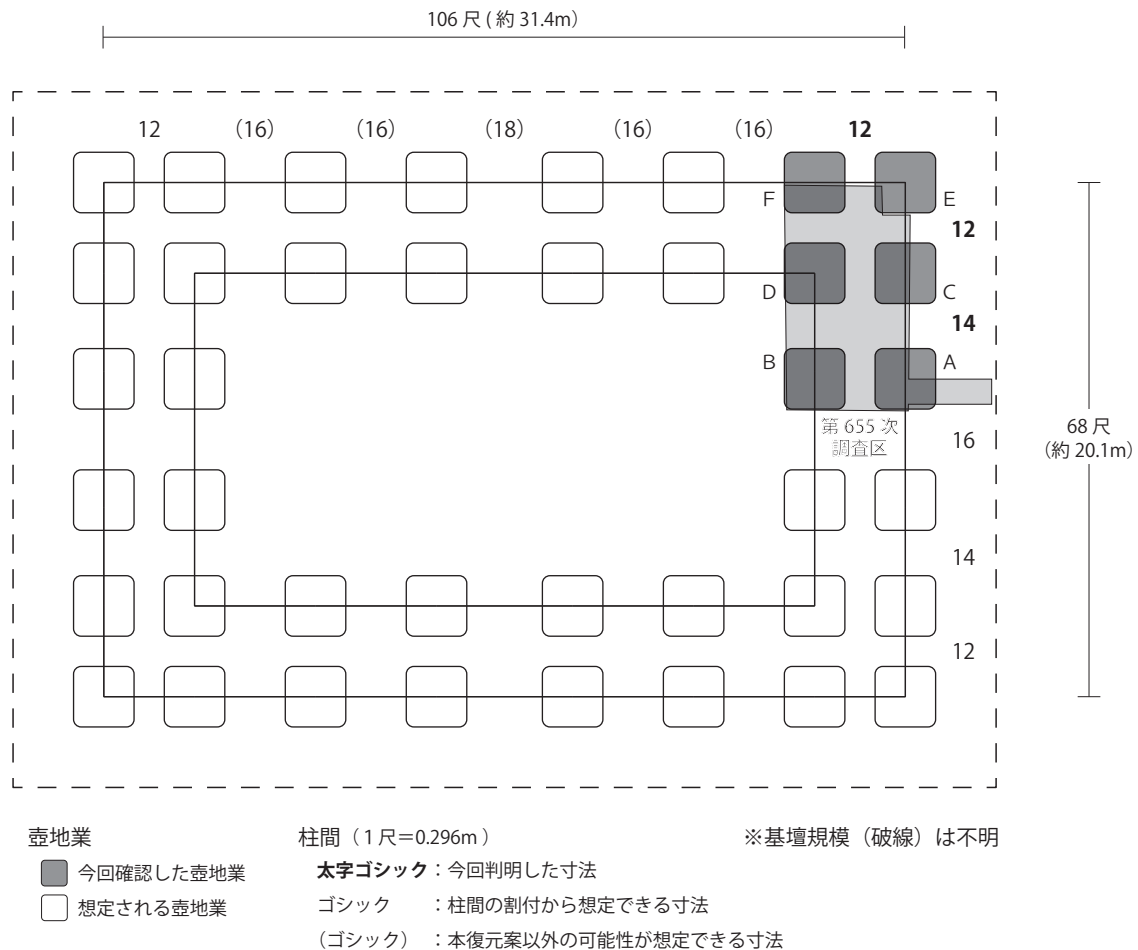


図 140 弥勒金堂復元案 1 : 300 (単位 : 尺)

得られたデータには限界があるものの、今回の調査成果（特に壺地業）を基に、弥勒金堂の復元を試みる。

①弥勒金堂基壇の位置 今回の調査では基壇縁が確認できなかったものの、『紀要 2014』において、本調査区の北東を通るクランク状の道路が弥勒金堂基壇の東北隅にあたる可能性が示されていた。今回の検討にあたり、既往の研究ではあまり参照されてこなかった航空写真（1955 年撮影）を見ると（PL44）⁶⁾、道路だけでなく地割として弥勒金堂の基壇痕跡が残っていたことが確認できた。これは想定される基壇規模ともほぼ一致しており、礎石採取穴 E・壺地業 E の位置が廂の隅柱にあたる可能性が高い。

②壺地業の平面規模（表 21） 壺地業の上部が傾斜しているため、検出面で確認した規模よりも垂直に掘り込まれる下半部のほうが、壺地業施工時の本来の規模を反映

している可能性が高い（表 21 模式図）。地業の南北規模がわかるものは壺地業 C・D、東西規模がわかるものは壺地業 A のみであり、それぞれの規模は、一辺約 2.4m（8 尺）である。今回は、壺地業 A～F がいずれも 8 尺四方で計画されたと仮定する。

③壺地業の心々間距離 壺地業 C-D の心々間距離は約 3.6m（12 尺）であり、壺地業 A-B・E-F 間もこれに矛盾しない。一方、壺地業 A-C・B-D の心々間距離は約 4.2m（14 尺）である。

④弥勒金堂の柱配置 弥勒金堂の規模は、資財帳から、桁行方向は 106 尺（長十丈六尺）、梁行方向は 68 尺（広六丈八尺）であることがわかる。薬師金堂の調査成果から、この規模は柱間の総長であると考えられる。

『紀要 2014』では、条坊と東西両塔の中軸の延長線上に弥勒金堂の中軸をあわせて推定復元しているが、今回

検出した礎石抜取穴・壺地業の A・C・E の位置は、推定された弥勒金堂の東端の柱位置とみて矛盾しない。

そこで、壺地業の心々間距離を柱間寸法とみて、柱配置を検討する。梁行方向の柱間は、端間が桁行方向と同様に 12 尺と仮定して $12 \text{ 尺} + 14 \text{ 尺} = 26 \text{ 尺}$ となる。これを北から 2 間分とし、南から 2 間分も同様の柱間と想定すると、残る 1 間は、 $68 \text{ 尺} - (12 \text{ 尺} + 14 \text{ 尺}) \times 2 = 16 \text{ 尺}$ となる。このことから梁行方向の柱間は、中央間が 16 尺、脇間が 14 尺、端間（廂）が 12 尺となる。この検討結果は、①で指摘した礎石抜取穴・壺地業 E が廂の隅柱にあたることも整合する。

③の検討から、桁行の端間は 12 尺であることがわかり、残る 5 間の総長は $106 \text{ 尺} - 12 \text{ 尺} \times 2 = 82 \text{ 尺}$ となるが、その割り付けはいくつかの可能性が考えられる。今回は、中央間 1 間を 18 間とし、残り 4 間をそれぞれ 16 間で割り付けた。以上の検討を基に作成した弥勒金堂の復元案が図 140 である。

（3）まとめ

本調査の成果をまとめると、次の通りである。

①**弥勒金堂の基壇・壺地業を確認した** 弥勒金堂はこれまで未調査であり、遺構の残存状況が不明であった。本調査の結果、礎石は抜き取られていた一方で、基壇土や壺地業が良好な状態で遺存していることが判明した。また、壺地業を施工した後に基壇を構築するという特徴的な工法を採用したことがあきらかとなった。

②**近世（以降）に礎石が抜き取られたことを確認した** 基壇上面で礎石抜取穴とみられる大土坑を検出した。出土遺物から、抜き取られた時期が近世（以降）に降ることが判明した。なお、元禄 11 年（1698）に描かれた「西大寺現存堂舎絵図」（東京大学文学部蔵）には、「弥勒金堂跡」の文字と礎石の描写が認められる。本絵図の信ぴょう性については疑問が呈されているが⁷⁾、本調査の所見からみると、本絵図の作製時点では弥勒金堂の礎石が遺存していたとみても矛盾はない。

③**弥勒金堂の柱配置の再検討をおこなった** 今回検出した礎石抜取穴・壺地業と既往の復元案における弥勒金堂の推定柱位置を比較すると、想定よりも北側にずれていることが判明した。壺地業のプランの検討を通して柱配置を再考し、新たな復元案を提示した。一方で、弥勒金堂全体の柱配置や北面回廊との接続関係については、

データの不足もあり、課題が残る結果となった。今後の周辺の調査に期待したい。

西大寺旧境内では、金堂院にとどまらず再開発が進みつつあるが、多くの場所で創建期の遺構が良好な状態で確認されている。今後、地域住民への周知活動などを通してそれらの遺跡がもつ魅力を広め、その価値についても理解を深めることで、適切な保存・活用が講じられるよう最善を尽くしたい。

（田中）

註

- 1) 奈良市教育委員会「25.平成 14～17 年度実施試掘調査一覧」『奈良市埋蔵文化財調査年報平成 17（2005）年度』2008。
- 2) 奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』昭和 63 年度、1989。
- 3) 旧平城 No. 14 は 2019 年度に滅失。
- 4) 土壌サンプルの分析成果については、次年度以降に改めて報告する。
- 5) 青木敬「国分寺造営の土木技術と堂塔－相模・武蔵国分寺の堂塔造営順序の復元をめぐる－」『國學院雑誌』國學院大學、第 123 巻第 4 号、2022。
- 6) 岩波書店『奈良六大寺大観』第 14 巻、1973。この中で示された境内地図（11 頁）は昭和 38 年（1963）撮影の空中写真をもとにしており、『紀要 2014』図Ⅲ－35・36 も同時期の空中写真から作図した地図を用いている。この頃には、今回の調査地とその南隣接地には、すでに民家が建てられている様子が窺える。
一方、大岡実・浅野清「西大寺東西両塔」『日本建築学会論文報告集』54、1956 掲載の空中写真（第 1 図、782 頁）では、まだ民家はなく、弥勒金堂推定地全体が田んぼの状態である。PL44 で使用した空中写真は、奈文研が 1955 年に撮影したものであるが、西大寺東西両塔の発掘調査には奈文研が大きく関わっていたことをふまえると、当該論文の空中写真と同一の可能性が高い。
- 7) 『平城京右京一条北辺四坊六坪発掘調査報告』1984。